



JAXA 宇宙科学研究所 & 相模原市立博物館見学会



JAXA で今一番の注目は何と言っても「はやぶさ2」の話題ではないでしょうか。はやぶさ2は、令和元年11月13日にリュウグウを出発し、リュウグウでの任務を完了8億キロの長旅を地球へ向けての、イオンエンジンを点火し帰路に就いたところです、令和2年の暮れごろに、オーストラリア南部中央のウーメラ砂漠にカプセルが帰還予定です。はやぶさ2は、2014年12月に地球を出発し、18年6月にリュウグウへ到着、2回のピンポイントタッチダウンに成功、小型ロボットを投下し600枚もの写真を撮り、エクストラサクセスをなし得ようとしています。



さて、何故このような快挙を成しえることが出来るようになったのでしょうか、昭和29年5月19日に糸川英夫博士の論文「日本の航空は今後どうなる」の冒頭に、日本は1940年から1945年に70000機の航空機を生産し有数の生産国であったと記されています、ペンシルロケットに始まり多くの困難を乗り越え、H-II B 2段式、全長56m、551トンの大型主力ロケットにたどり着いたと思います。2003年10月には宇宙開発事業団と航空宇宙技術研究所と統合し、宇宙航空研究開発機構（JAXA）が発足し、宇宙科学の一元化を目指した宇宙科学本部へと成果が引きつがれました。



2015年4月に「TANSAX」(タンサックス)設置され、JAXAと企業、大学、研究機関、とて宇宙探査イノベーションハブとして、宇宙探査のための技術研究開発から、誰も何も予想しないようなこと、「X」を生み出すという意図を込めた目的でつくられました。はやぶさ2の現場では「確認」と「ブリーフィング」が何回も行われ、はやぶさ2のミッションマネージャ 吉川氏や、プロジェクトエンジニア 佐伯氏も、現場では特に大切にしていることと言っておられました。



タンサックスにしても、はやぶさ2の現場でも、先のラグビーワールドカップで日本チームが結成した「ワンチーム」で、はやぶさ2のプロジェクトも進行していると考えられます。最大の局面は砂の入ったカプセルの帰還です、今回は月の軌道からカプセルを放出することをJAXAが検討しているとのこと、放出後、はやぶさ2は新たな探査のため別の天体へ転戦する計画があり、津田氏は「着陸と違ってやり直しはきかない」と話す。



相模原市立博物館

相模原市立博物館では、屋上から見た今日の夜空をプラネタリウムで観察し、夜空のショーを堪能しました。



昨日までの雨が嘘のようで、今日は青空が広がり 30 名もの参加をいただき、事故もなく無事終了されたこと、打ち上げも盛大に行われ一日を締めくくりました。星空も良く見えるようになり、夜の街にと消えていきたいような衝動にかられた初冬の夜でした。

文章	熊田 昌秀	
写真	榎原 勝	富山 友次
編集	富山 友次	